

「^{がしゅう}我執（戦争が教えること）」

森林 晃祥

今年^{ごとし}は戦後70年にあたり、各テレビ局では第二次世界大戦、太平洋戦争の様子を記録した映像と、戦争体験者の声を織り交ぜた番組が放映されました。

そこには、国益^{うた}を謳い勝利を信じ始めた戦争が、多大な犠牲と損失をもたらしたという悲しみと遣る瀬^{やせ}無さがありました。

大儀^{たいぎ}を立て、どんなに自国の正当性を謳っても、戦争^{おもむ}がもたらすものは殺戮^{さつりく}と破壊^{はかい}でしかない。

私は戦後生まれで、戦争の経験はありません。ただ、寺に生まれご門徒さんの所へお参りに行くと、10年くらい前までは、戦争当時のことを話してくださいのおじいさんやおばあさんが何人も見えました。戦地^{おもむ}に赴いて生きて帰ってきた人、シベリアでの強制労働を経験した人、国内で被災した人、親や兄弟、子どもを亡くした人、その思いは様々でした。その人たちもほとんど亡くなって逝かれました。

個人が行えば人殺しとして罪に問われ、国が行い勝利すれば罪には問われません。

しかし、勝利した連合国にもたくさんの人が犠牲となり、精神を病んだ人もたくさんいたそうです。つまり、勝者も敗者もお互いに傷つくということです。

私たちの日常の中でも、誰かが気に入らないからといって、他を非難し、意見を聞き入れず、自分を正当化し、自分さえ良ければという自己中心的なその心が他者を傷つけ、そして孤立化し、争いへと繋がる。その私たちの心こそが戦争の本質なのかもしれない。

共にという世界こそが、私たちが本当に願い求めているところではないでしょうか。